様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４５２７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０５９６

研究課題名（和文）資源の限定観が主観的幸福感に及ぼす影響の検討

研究課題名（英文）The effect of limited view of resources on the subjective well-being

研究代表者
村上　幸史（Murakami, Koshi）

神戸山手大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：００４５４７７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,700,000円、（間接経費）　510,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「個人が成功や幸福を得るための資源には限りがある」という考え方の中でも、特に特定の社会での限定説（「対人的定量観」）と主観的幸福感の関連性について検討を行った。その結果「対人的定量観」を持つ者は主観的幸福感が低く、競争的達成動機も高く、不幸の程度を相対的に判断しやすいことが示唆された。この影響はweb上でニュースを判断する実験を通して、他者の不幸を非難する傾向や喜ぶ（シャーデンフロイデ得点）傾向の形でも示された。このような観点から主観的幸福感を維持する過程は、幸福感を高めることに関する負の影響と考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, the relevance of subjective well-being and limited theory in the particular society ("interpersonal fixed quantity feeling"), in the ideas "the resource for individuals to gain success and well-being is limited", was examined. Results indicated that those who has "interpersonal fixed quantity feeling" is low about subjective well-being, is high about competitive achievement motivation, and relatively easy to judge concern about the extent of unhappiness. These effect were also shown in the trends of condemning and rejoicing (schadenfreude scale's score) the unhappiness for others by the experiment to judge the news on the web. From these findings, We considered that the process to maintain subjective well-being are negative effect to enhance subjective well-being.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：主観的幸福感　資源の限定観　しろうと理論　社会的比較

１．研究開始当初の背景

幸福（well-being）に関する議論は、アリストテレスやソクラテスなど、ギリシャ時代から議論されている、古典的な哲学的テーマである。中でも、主観的な幸福感に関しては、心理学の領域でも近年研究が盛んになっている問題であり、その知見が徐々に蓄積されてきている（大石，2009）。

日本でも、この主観的幸福感に関する関心は高まりつつある。例えば内閣府の国民生活選好度調査の結果によれば、日本人の主観的幸福感は、主要各国に比べて、あまり高くはないことが指摘されており、その背景として景気の動向や日本社会の構造転換などが挙げられている（内閣府，2010）。現実的にも、平均所得が減少し続けていることや、国際的にも上位とされる自殺者数も横ばい傾向にあることなどから、高齢者に用いられていたQOL（Quality of life）の指標が改めて着目されるなど、主観的幸福感を高めることの重要性が喧伝されつつある。

しかしながら、どのような幸福感でも高めたり、維持されれば良いものだろうか。本研究の目的は主観的幸福感を高めることが、必ずしもプラスにならない背景を説明することである。

本研究で注目するのは、「資源が限定である」という考え方自体が、主観的幸福感に及ぼす影響についてである。この資源の限定説とは、「個人が成功や幸福を得るための資源には限りがある」という言説のことを指す。代表的なものとしては「人の寿命には限りがある」や「ポストの数は決まっている」、「時間を節約する」などが挙げられる。この資源には、その真偽を問わず、有形的なものだけではなく、無形的なものや比喩的な例え、非科学的なものも含まれている。

以上のような限定説には、個人単位で限りがあると考える説と、特定の社会での限定説を唱えるものに分けられる。本研究では、特定の社会での限定説が及ぼす負の影響に焦点を当てる。まず、特定の社会での資源の限定説は、資源の偏りを喚起させるため、個人間でその資源を奪い合うという発想に結びつく可能性が高い。そのため、限定説は主観的幸福感を低下させる可能性が高いのではないかと予測する。これは、現実に資源の獲得に成功した場合も同様である。成功は個人単位では主観的幸福感を高める可能性が高いが、実際に資源が限定されている場合には、獲得に失敗した者が主観的幸福感を下げ、結果的には社会全体で見た場合の平均的な幸福感は上昇しないためである。

また相対性剥奪理論によれば、傍から見れば豊かな者（つまり資源を獲得している者）でも、主観的幸福感は必ずしも高くないことが説明されている。

特定の社会での資源の限定説を持つ場合には、主観的幸福感に介在する他者の要因が主観的幸福感の維持に利用されると考えられる。Lyubomirsky & Ross（1997）は、幸福感が高い者は他者の成績を意識しない傾向が強く、どのような状況でも自己評価が高いのに対して、幸福感が低い者は他者を意識した評価によって、自己評価が変化するという実験結果を示している。このことから、「人の不幸は蜜の味」という諺があるように、社会単位での資源の限定説を意識すれば、他者の不幸や失敗を喜ぶ反面、他者の幸福は共有されにくくなる。この他者の不幸に積極的に接することにより、維持される幸福感は一種の社会的比較（下方比較）であり、相対的幸福感と呼ぶことができるものである。

ただし、以上の仮説は幸福観の違いにも左右される問題である。一般には「幸福な者が、これからどのような人生を歩むか」という、個人の将来的な出来事の成否に関するしろうと信念が存在する。「人生万事塞翁が馬」という諺があるように、アジア流の幸福観では、幸福は長く持続しないと思われている節がある。また日本では不確実な事象に対しても、個人の努力を重視する。そのため努力不足や妥当でない形で手に入れたポジティブな成果を、特に問題視する傾向にある。これは他者が得たポジティブな成果を判断する場合に影響する要因である。先に挙げた「個人が持つ運の量が決まっている」という言説が広く普及しているのも、他者が得た幸福に対して将来の失敗や不運を予測するという、他者に対する妬みの反映でもある。このように現状の幸福感だけではなく、将来の予測を含めた判断も検討する必要がある。

もう一つ重要な点は、主観的幸福感の測定では、人生に対する満足感を含めた認知的な側面と、現時点でのポジティブ感情面を区別するのが主流となっている点である。後者は前者に比べて変動しやすいという特徴がある。現状の快楽を肯定的に捉えるアメリカ的な幸福観と異なり、ヨーロッパやアジアでは、悲しみや苦しみを乗り越えてきた人生こそが幸福と捉える幸福観が存在する（大石，2009）。冒頭に挙げた日本人の主観的幸福感として問題視されているのは前者の問題であり、資源の限定説により低下するのも人生に対する満足感を含めた認知的な側面である。他者の不幸に接することで一時的に変動するような、感情面での主観的幸福感を高めることでは、問題の解決につながるとは言えないだろう。

２．研究の目的

本研究における目的は、主観的幸福感を高めることが、必ずしも個人的にプラスにならない背景を説明することである。概して言えば、特定の社会での資源の限定説により、他者との比較で相対的に高まったり、維持されたりする主観的幸福感は有益ではないことを実証する。主観的幸福感に関する研究の中でも、幸福性善説ではない視点からのアプローチはこれまで見られなかったものである。

本研究では資源の限定説と主観的幸福感の関係、特に他者に生じた出来事に関する反応の影響を明らかにすることを目的とした実証的研究を行う。

1．資源の限定説について、雑誌や新聞、ネット上で流布している言説の中から、特に無形の資源に関する表現と使用される文脈について収集し、分類する。作成した項目を元に、資源の限定説の信念と主観的幸福感、あるいは幸福観の関連性について調査する。

2．資源の限定説の効果を検討するために、成功が特定の者に限定された構造における、不確実事象の選択と結果の受容についての実験室実験を行い検討する。

3．一時的な主観的幸福感（感情的側面）を維持する過程として、他者の不幸や幸福に対する受容の仕方について、メディアに発信された情報に接する態度を検討するための実験を行い、主観的幸福感を維持する過程を検討する。

３．研究の方法

①「資源の限定観」に関する調査　まず本やwebから、「資源の限定観」に該当する表現が用いられている文章を抽出した。抽出した104 項目の中から、類似した項目をまとめ、さらに石油や領土など実資源に該当すると考えられるものを除き、40 項目を選出した。

続いて大学生 83 名に予備調査を行った後、資源の限定観を測定する項目として、21 項目を選定した（幸福、活動のエネルギー、チャンス、勢力、異性にもてること、やる気、生気・気、人気、魔力、流れ・勢い、生命力、善意や優しさ、人脈、熱くなる・夢中になれること、得意な分野（領域）、喜びや快感、愛情、センス・才能、縁・出会い、アイデア、運）を選択した。

本調査では、調査会社に委託し、500 名（男女各 250 名）を対象にweb 調査を行った。上の 21 項目について「対人的定量感（世界、自分の周り）」「対人的剥奪感」「個人内減少感」「個人内定量感」の 5 分野それぞれに該当するものを全て選択してもらった。この他に、主観的幸福感尺度（Subjective Happiness Scale）、全般的な生活満足度尺度（Satisfaction with Life Scale）、幸福や不幸に関する価値観に関する項目、運に関する態度尺度、JWB 完成版尺度、達成動機尺度、フェイス項目を測定した。

②他者の不幸や幸福に対する受容の仕方に関する実験　提示する記事割合を検討するために、読売・毎日新聞のデータベースから、社会面の記事を各 30 日分、計 1505 記事を抽出し、記事の内容を登場人物にとってポジティブ、ネガティブ、その他に分類した。その結果、おおよそ 1:6:3 の割合（4.0%, 56.2%, 33.9%）で構成されていることが分かった。

次に大学生 38 名を対象とした実験を行った。第一セッションとして、参加者には「幸福と幸運に関する調査」として、質問紙に回答を求めた。2 週間後に「ニュースに関する調査」を行うことを説明し、質問紙に回答を求めたあと、新聞記事を印刷したものを配布した（第二セッション）。記事は現実に生じた「毒物発言で失職」「落書きで野球部監督を解任」「飲酒運転をつぶやき停学」という 3 つの記事から構成されており、いずれも内容は加害者の責任でネガティブな結果を招いたものになっている。記事の内容について再度回答を求めた（第三セッション）。

第一セッションで回答を求めた項目は、運に関する態度項目、主観的幸福感尺度、全般的な生活満足度尺度、他者の不幸に関する尺度や感情に関する項目である。第二セッションでは、10 種類のニュース記事についてタイトルのみを提示し、その認知度と関心度合いを評定してもらった。記事の割合は、先の新聞記事を分析した割合を元に構成した。この他に資源の限定観に関する項目についても回答してもらった。第三セッションでは、記事ごとに第一セッションと同じ感情に関する項目に加えて、記事の対象人物が「どの程度非難を受けるべきだと思うか（自己非難）」、「記事になった当時は、読者はどの程度彼を非難していたと思うか（他者非難）」、主観的幸福感尺度、ニュースへの接触度合いについて回答を求めた。

以上の実験の効果をwebでも確認するために、大学生 51 名を対象とした実験を別クラスでも行った。実験の都合上、10 種類のニュース記事に関する認知や関心度合い、及び第一セッションでの主観的幸福感尺度、全般的な生活満足度尺度、他者の不幸に関する尺度や感情に関する項目については割愛した。

③成功が限定される構造における選択実験

大学生を対象とした実験を行った。実験は授業内で行い、1 クラスを争奪条件、もう 1 クラスを非争奪条件に割り当てた。参加者にはルーレットを実験者が 1 度だけ回して、赤か黒かの色を当てるゲームであることを説明した。参加者には袋に入ったカードを引いてもらった。中には表には 500 円分の図書カードを模した図案、裏には赤か黒かの色が塗られたカードが 1 枚入っており、カードは通常の半分のサイズになっている。

争奪条件のカードには数字と A か B かのアルファベットが振られており、「カードの半分がペアになっており、ペアのカードには参加者のカードとは異なった色が塗られていること、また参加者のカードが書かれた色が的中した場合には、同じ数字のペアのカードを奪うことができる」と説明した。これらの手続きはペアの相手が誰かが判らないようにするためである。

非争奪条件では色が塗られたカードが入っているのは同じだが、全員が左半分の図案になっており、的中した場合には右半分のカードがもらえることを告げた。また、両方の

グループにこれらのカードは半分では使えない、つまり合わせて１枚になった場合（的中した場合）に、実際の図書カードと交換することも告げた。手続きを説明した後に参加者には事前質問紙に回答してもらい、ルーレットを実際に回して的中・不的中の結果を決め、的中者には賞品を渡した。その後、事後質問紙に回答してもらってからデブリーフィングを行った。

回答してもらった主な項目は以下の通りである。的中可能性と自信（事前と事後（もう一度同じ実験を行ったと仮定した場合））、感情を測定する項目（他者の不幸に関する尺度と「ざまあみろ」など）、運に関する態度項目、「一時的な幸福感」を測定する項目（全般的な生活満足度尺度を改変）、資源の限定観に関する項目

４．研究成果

①「資源の限定観」に関する調査

（1）尺度構成　「対人的定量感」項目の分類を行った。「対人的定量感（世界、自分の周り）」の項目について、カテゴリ主成分分析を行い、幸福や愛情のポジティブ感情と生命力やエネルギーなどの７項目で構成される「感情」カテゴリー、運、流れ・勢いや人気、勢力の影響力など５項目で構成される「勢い」カテゴリー、縁・出会いや人脈の対人関係や、アイデアや領域の知能資源など６項目で構成される「成功資源」カテゴリーという、3 カテゴリーが得られた。それぞれのφ係数（.38～.65）から、世界と自分の周りにおける「対人的定量感」の項目は回答が類似していると考え、該当項目を１点として合計得点を作成した。ただし、いずれの得点も半数以上が 0 点（全て非該当）であるため、以下の分析では０点か、それ以外の有無による２群に区分して分析を行った。

(2)主観的幸福感との関連性　この「対人的定量感」に関する 3 下位尺度群を独立変数、主観的幸福感尺度及び生活満足度尺度の合計得点を従属変数として分散分析をおこなった。その結果、主観的幸福感尺度得点において、「感情」カテゴリー有群の方が、無群よりも得点が低いという有意な差が得られた（$F(1, 498)=3.95$, $p<.05$）。つまり「幸福や愛情などが定量である」と思う回答者ほど、主観的幸福感が低いことが示された。他の項目についても、有意ではなかったが、共通して「対人的定量感」有群の得点が低かった。

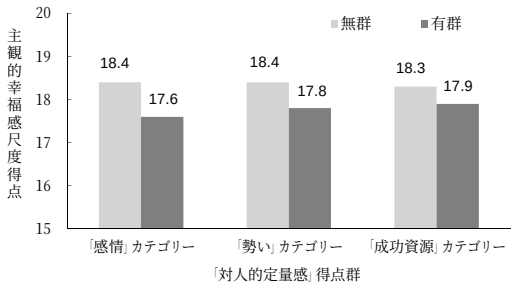

Figure1　主観的幸福感得点の差異

(3) JWB 完成版尺度や競争的達成動機との関連性　「対人的定量感」の３カテゴリー得点をそれぞれ独立変数、JWB 完成版尺度得点と競争的達成動機得点を従属変数とした分散分析を行ったところ、3 カテゴリー全てでカテゴリー有群の方が無群よりも、現状の不公正感得点と競争的達成動機得点が高いという有意な差が見られた。因果の公平性得点については、「成功資源」カテゴリーで有群の方が低いという有意差が見られたが、「感情」カテゴリーでは差がなく、「勢い」カテゴリーでは有意な傾向にとどまった。

回答者は収入を元に、それぞれ高中低３群に割り当てられている。そこで収入と競争的達成動機得点を独立変数として、幸福感の二つの測度（SHS と SWLS）を従属変数とした分散分析を行ったところ、SWLS については交互作用が見られ、競争的達成動機が低い群は収入と関係なく、SWLS がほぼ同じであるのに対して、高い群では収入に応じて SWLS が変化する傾向が見られた。

(4)他者との相対的幸福観　幸福に関する他者意識の項目（15 項目）については、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行い、「失敗の位置づけ」「成功の位置づけ」「他者との相対的幸福」「他者との相対的不幸」の４因子が得られた。これらの合計得点を作成し、「対人的定量感」に関する３下位尺度群を独立変数とした分散分析を行ったところ、「成功の位置づけ」と「他者との相対的不幸」得点については 3 カテゴリー全てで、「失敗の位置づけ」と「他者との相対的幸福」得点については、「勢い」カテゴリーのみで、有群の方が無群よりも幸福に関して、他者との相対的な判断をしているという有意な差が得られた。

これらを従属変数、主観的幸福感を独立変数として分析を行ったところ、「相対的不幸」「失敗の位置付け」「成功の位置付け」については、不幸群の方がその程度が高いことが分かった。唯一「相対的幸福」については幸福群の方が高かった。

（5）実感の重要性　本調査では幸福感と不幸感に関する非対称性についても検討している。「幸福を実感すること」（4.57）は、「不幸を実感すること」（3.72）よりも評定値が高く、また「実感がない場合に幸福である」と回答する傾向（4.57）は、「不幸である」と回答する傾向（3.23）よりも高かった。このことは不幸という判断が幸福と異なり、何らかの実感を条件としているという非対称性を示していると考えられる。

これらの項目についても、「対人的定量感」に関する３下位尺度群との関連を検討したところ、幸福を実感する程度は「感情」カテゴリーのみで差が見られたのに対して、不幸を実感する程度は全てのカテゴリーにおいて、差が見られた。また、「感情」カテゴリー以外では、不幸という実感がなくても「不幸である」と判断している割合が高いことが分か

った。さらに、これらを従属変数、主観的幸福感を独立変数として分析を行ったところ、不幸群の方が幸福の実感を重視しており、「安定した生活＝幸福」という認識は不幸群では低いことが分かった。

②他者の不幸や幸福に対する受容の仕方に関する実験

（1）ニュースへの関心度　10 種類のニュース記事への認知度は 1.39～2.18、関心度は 2.16～3.05（各 5 段階）とあまり高くなかった。ポジティブな記事（「人助け」と「受賞」）についての関心度は 2.89 と 2.38 であった。

この関心度に関して、「対人的定量感」の高低を独立変数として分析したところ、ポジティブな記事の両方とも、「感情」カテゴリー高群の方が関心度は低かった。ネガティブな記事では第二セッションで用いた「落書き」の記事にのみ、同じ傾向が見られた。また、この記事については、主観的幸福感尺度高群ほど関心の程度は高かった。

（2）感情判断　第三セッションで提示した 3 つのネガティブな記事に関する評定のうち、シャーデンフロイデ感情得点（以下 SF 得点）に関しては、印刷提示条件では「飲酒運転」のニュースが最も高く、web 提示条件では「毒物発言」が最も高かった。自己非難と他者非難については「毒物発言」のニュースが最も高かった。ただし、これらの得点には条件間の差が大きく、SF 得点は web 提示条件の方が高かったのに対して、自己非難は印刷提示条件の方が高かった。また「対人的定量感」の項目は①と同様に、該当項目を 1 点として合計得点を作成したところ、3 カテゴリーとも web 提示条件の方が得点は高かった。そのため、平均点以上かどうかによる高低の 2 群に区分した。以上の傾向から、両条件は分けて分析している。

まず SF 得点については、「対人的定量感」の高低を独立変数として分析したところ、印刷提示条件では「飲酒運転」と「落書き」のニュースでは「感情」・「成功資源」カテゴリー高群の方が得点は低かった。逆に「毒物発言」のニュースでは、「勢い」カテゴリー高群の方が得点は高かった。web 提示条件では「落書き」「毒物発言」では「感情」カテゴリー、「落書き」では「成功資源」カテゴリーでも、「飲酒」では「勢い」カテゴリーで、いずれもカテゴリー高群の方が得点は高いという有意差が見られた（全てで得点の方向性は同じであった）。

次に自己非難と他者非難については、印刷提示条件では、「感情」・「成功資源」カテゴリー高群の方が、「飲酒運転」のニュースにおいて他者非難を推定する程度が低く、「落書き」のニュースでは自己非難の程度が低かった。「毒物発言」のニュースでは、逆に「勢い」カテゴリーで自己非難、他者非難の両方ともに、カテゴリー高群の方が高かった。

web 提示条件では、「飲酒運転」と「落書き」の記事で「勢い」カテゴリーの、「落書き」では「感情」カテゴリーの、「毒物」では「勢い」カテゴリーで、いずれもカテゴリー高群の方が得点は高いという有意差が見られた（全てで得点の方向性は同じであった）。

（3）幸福感との関連　「対人的定量感」のうち、両条件ともに「成功資源」の 3 カテゴリーのみ全般的な生活満足度尺度得点が低かった。主観的幸福感尺度得点については、印刷提示条件では差が見られなかったが、web 提示条件では全てのカテゴリーで、高群の方が得点は低い傾向が見られた。

この主観的幸福感尺度得点と「対人的定量感」を独立変数、SF 得点を従属変数とした分散分析を行ったところ、web 提示条件では「毒物発言」と「落書き」で、「感情」カテゴリー高群は、元々の主観的幸福感尺度得点が低いほど、感情得点が高くなっていることが示された。同様の傾向は、「飲酒」に関して、「勢い」カテゴリーでも見られた。

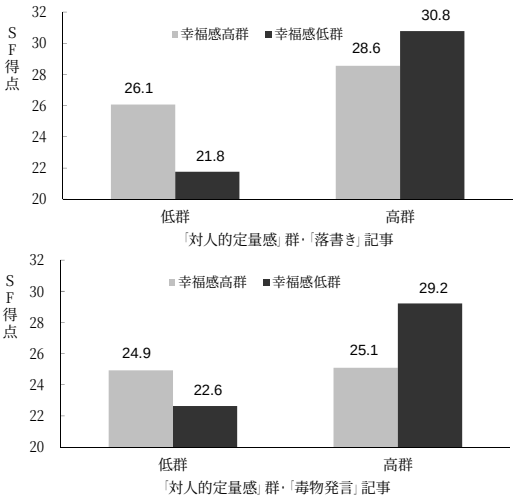

Figure2　SF 得点の差異（web 提示条件・「落書き」記事）

SF 得点については強い相関ではなかったが、全般的な生活満足度尺度得点や主観的幸福感尺度得点とは正の相関を示していた。

③成功が限定される構造における選択実験

以下の分析では「対人的定量感」に関する項目のうち、「幸福」及び「運」の 2 項目について、世界、自分の周り、他者との間のいずれかに限定観を持つ者を選択し、定量感の有無としてカテゴリー化した。定量感有群は「幸福」が 41.5%（44 名）、「運」が 53.8%（57 名）であった。両者は独立していた（χ^2=.86, n.s.）。

まず「一時的な幸福感」を測定する項目を合計し、得点化した（事前:18.54、事後:18.01）。これについて、実験条件・結果（的中・不的中）・対人的定量感の有無を独立変数として分散分析を行ったところ、事後の「一時的な幸福感」について、的中の場合にのみ有意に高かった（「幸福」: F（1, 103）=5.70, p<.05; 「運」: F（1, 103）=5.48, p<.05）。この得点の事前と事後の差を求めて分散分析を行ったところ、ルーレットの結果

Table1 「一時的な幸福感」の変化量

	ルーレットの結果		「運」(定量感)		「幸福」(定量感)	
	的中	不的中	無群	有群	無群	有群
争奪条件	2.74	-1.63	0.91	0.21	0.81	0.28
非争奪条件	3.04	-2.29	-0.63	1.14	1.28	-0.53
平均	2.87	-1.90	0.41	0.68	1.00	-0.07

（F（1，103）=49.23，p<.001）と「幸福」に関する対人的定量感の主効果（F（1，103）=3.48，p<.10）のみ有意な傾向が見られた。争奪条件のみだけで見ると、「幸福」に関する定量感有群では無群に比べて、的中と不的中の場合の得点の差は大きかったが、有意な差ではなかった。

次に他者の不幸に関する尺度のうち、SF 得点について分析したところ、「一時的な幸福感」と同様に的中の場合の方が事後の得点（「幸福」: F（1, 103）=2.87, p<.10; 「運」: F（1，103）=4.04，p<.05）も、得点の変化量（「幸福」: F（1, 103）=7.86, p<.01; 「運」: F（1，103）=14.26，p<.001）も高かった。有意ではなかったが、「運」に関する定量感有群では、争奪条件で的中した場合に、この得点がプラスに変化する割合が大きく、唯一正の値（事後の値の方が高い）になっていた。

その他、的中時の喜びが大きいと想定しているのは非争奪条件（4.80）なのに対して、悲しみが大きいのは争奪条件（3.25）であり、「運」に関する定量感有群は争奪条件で的中した場合、つまりペアから奪う方の喜びを高く予測していた（F（1, 104）=3.88, p<.10）。

最後に、ルーレットを回す前の的中可能性と自信について、同様の分散分析を行った。定量感有群の方が、的中可能性と自信の評定値は低かったが、有意な差は見られなかった。続いて、ルーレットの結果（的中・不的中）を加えて、同様に分散分析を行った。その結果、争奪条件とルーレットの結果について交互作用が見られ、争奪条件では的中した場合でも、次試行を仮定した場合の的中可能性は上昇しないという結果が示された（F（1, 104）=3.08，p<.10）。

④総合考察及び今後の展望

①「資源の限定観」に関する調査では、「対人的定量感」を持つ者は割合としてあまり多くはないが、彼らは主観的幸福感が低いことが示された。また概して、現状の不公正感得点も高いことが分かった。その背景として、「対人的定量感」を持つ者は競争的達成動機得点も高く、また「相対的幸福」を除いて、「相対的不幸」「失敗の位置付け」「成功の位置付け」という不幸の判断基準が相対的なものである点、加えて実感がなくても「不幸である」と判断したり、幸福の実感を重視している点からは、幸福と不幸は一軸上にあるというよりも、絶対的な幸福と相対的な不幸に分けられ、「対人的定量感」を持つ者は相対的に不幸の程度が高いことが示唆される。

②他者の不幸や幸福に対する受容の仕方に関する実験では、特に web 提示条件で「対人的定量感」を持つ者は、他者の不幸を非難する傾向や喜ぶ（シャーデンフロイデ得点）傾向が示された。印刷提示条件と web 提示条件で傾向に違いが見られたのは、「対人的定量感」の傾向に違いがあり、web 提示条件の方が得点は高かったこと、もう一つは個人的には非難は小さいが、他者は非難しているだろうという推測割合が web 提示条件で高かったことである。これはネット上での第三者的な視点を反映したものである可能性がある。

③成功が限定される構造における選択実験では、的中という結果の持つ影響が非常に大きく、争奪・非争奪の条件による影響はごくわずかで、争奪条件で幸福感が変動するという結果は示すことができなかった。

以上のことから、部分的ではあるが、「対人的定量感」を持つ者は相対的な判断をしやすいために、不幸の程度が高く、逆に他者の不幸を好む可能性があることが示唆された。これには、不幸の程度が高い者が「対人的定量感」を持ちやすいという可能性も含んでいる。ただし「対人的定量感」は競争的達成動機と結びついており、競争的達成動機によって、収入の多寡が幸福感を左右していた。このことから、社会構造が幸福感の判断にも関連する問題であり、競争的な社会構造が、マクロ的な視点から主観的幸福感を低下させる可能性を提言できると考えている。相対的な意味での主観的幸福感を高めることの価値は再考する必要があるだろう。加えて、成功が限定される構造においての判断に関する部分は、実験条件を変えるなどで、再検討の必要性があるだろう。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計５件）

①村上幸史（2011）.「運の譲渡」に関する一考察　日本質的心理学会第 8 回大会プログラム査録集，105、安田女子大学
②村上幸史（2012）. 資源の限定観に関する調査の試み　日本心理学会第 76 回大会論文集，267、専修大学
③村上幸史（2012）. 奪い合いの意識は不幸を招くか？－資源の限定観からの検討－日本社会心理学会第 53 回大会論文集，235、つくば国際会議場（筑波大学）
④村上幸史（2013）.「対人的定量感」と競争的達成動機の関連性　日本心理学会第 77 回大会論文集，181、札幌コンベンションセンター（北海道医療大学）
⑤Murakami, K.（2013）. Luck Resource Theory in the central Asia. the 10th Conference of Asian Association of Social Psychology, Universitas Gadjah Mada.

６．研究組織

(1)研究代表者

村上　幸史（MURAKAMI, Koshi）
神戸山手大学・現代社会学部・准教授
研究者番号：00454778